

まえがき

何十年前のことでしょうか。姉に連れられ、黒嶋観音さんの夏祭り、「十七夜祭」へ、お参りしたことがあります。

薄明りのお堂では、お坊さんが、パラパラパラと扇形のように経の本を開き、なにごとかおっしゃっておられます。やがてそれを閉じると、厚さ一〇センチもある紙の束になりました。姉にならって手を合わせ、頭を下げると、その紙の束で、背中をポンポンとたたかれたのです。一瞬、おどろきました。60余年も経って、大般若経の転読だったのだと、思い出されます。

今回「吉母かるた」の発行に際し、ご縁をいただきましたが、前述の「十七夜祭」が、日時を変えながらも継続され、一枚に加わっているのに感動しました。

このほか、ジュラ紀（約一億五〇〇〇万年前）の恐竜の足跡化石から始まり、神功皇后伝説と、他の地域では語ることでできない歴史に加え、美しい自然と人々の営みが、かるたの一枚一枚に楽しい絵とともに表現されました。

本州の最西端の地「毘沙ノ鼻」。この地名は、毘沙門天さまに由縁するものであろうと思いますが、いまだにその根拠をつまびらかにしていません。このかるたをめぐることによって、どなたかが発見してくださることを心待ちにしています。

「本州最西端のまち 吉母かるた」は、次代とつなぐ絆です。ご家族などでの遊びを通して、歴史を学び、人々の営みを肌と感じ、郷土を愛する心が前進するものと確信しています。さあ、あなたは何枚とれますでしょうか。そして、一枚一枚を味わってくださいと、企画したみなさん、なによりも原文を提供してくださった方への感謝になると思います。

平成三十年十月吉日

前下関市立中央図書館長 安富静夫